神のやま

第７号

播磨国総社　一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会

総社の年中行事 -江戸時代を中心に-

播磨学研究所運営委員兼研究員　埴岡　真弓

はじめに

播磨国総社・射楯兵主神社では、元旦から大晦日まで多くの年中行事が執り行われており、その数は優に六十を越えます。播磨国の神々一七四座を祀る式内社・射楯兵主神社は、江戸時代まで、「惣社」と表記されていました。今も継承されている、あるいは近代になって断絶した、惣社のいくつかの年中行事について考えてみたいと思います。

一　江戸時代の播磨国総社・射楯兵主神社

惣社の境内の様子は、『播州名所巡覧図絵』（文化元年（一八〇四）、以下『図絵』）に描かれています。

本殿の奥には、現在の「播磨国総神殿」に相当する「惣神十六社」がありますが、現在の「十二社合殿」の姿は見えず、その内の九社、一ノ宮社・二ノ宮社・粟嶋社・鞍屋社・角社・柿本（人丸）社・羽黒社・神明社は、独立した境内社として描かれています。角社は、中世、姫山の守り神の一つだったと考えられます。角社は、古代飾磨郡の大領とされる角野氏と関連する神社だったのではないでしょうか。

また、今は見ることのできない境内社の一つに、「惣神十六社」

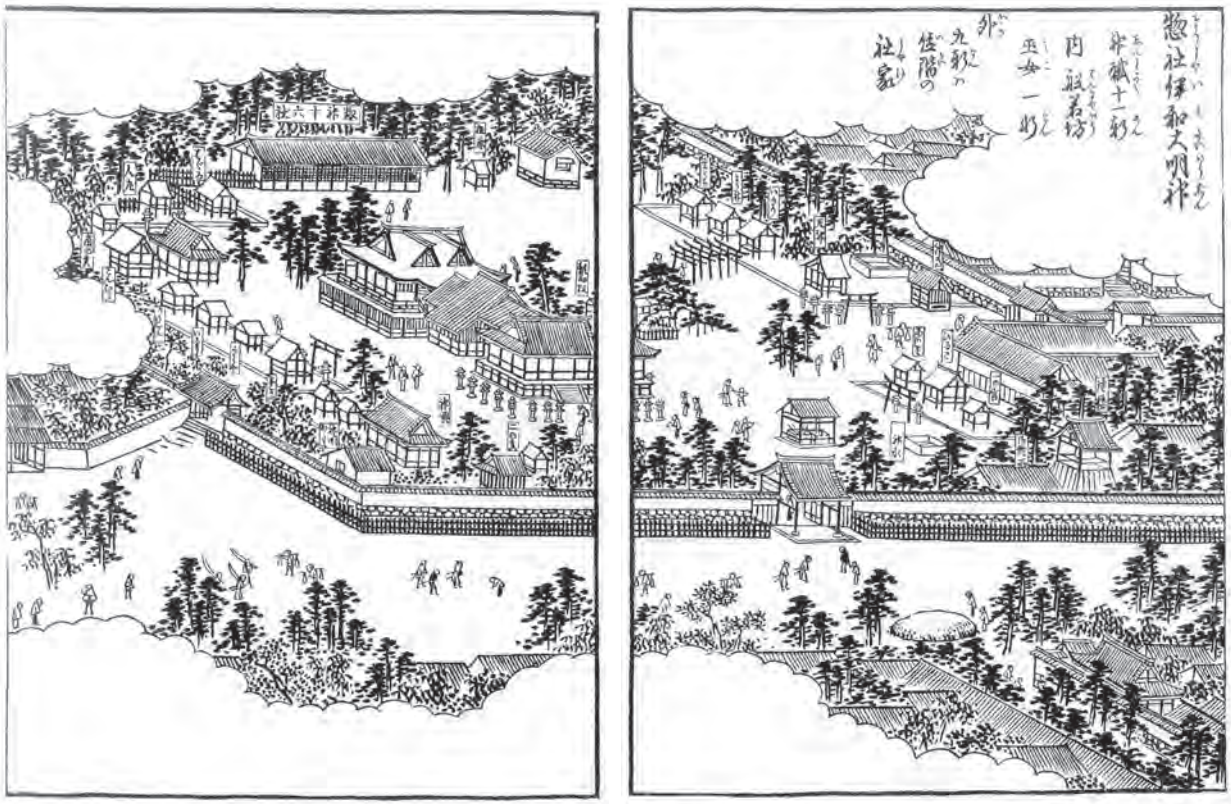

図１　『播州名所巡覧図絵』総社部分

の東に描かれた小祠「祖神」があります。姫路藩士・福本勇次が編んだ『村翁夜話集』（以下、『夜話集』）に記された惣社の末社の一つ、「公家権前」に相当すると考えられ、遡ると、天正四年（一五七六）の年紀を持つ「播磨府中めぐり」（『播陽万宝智恵袋』所収、以下『智恵袋』）の「久家若御前」に行き着きます。この神は、中世からこの地域で勢力を誇り、江戸時代には町年寄のトップに位置した国府寺氏の祖神と考えられます。姫山の神だったらしい長壁（刑部）明神・富姫明神も含め、中世に姫路地域で信仰されていた神々は、天下統一の時代、惣社に集合していったようです。

では、そうした惣社で、江戸時代、どんな年中行事が執り行われていたでしょうか。

二　江戸時代の年中行事

江戸時代の年中行事の一つの目安となったものに、元亀元年（一五七〇）の「府中社年中行事」（『智恵袋』）があります。いろいろ興味深い行事があるのですが、たとえば、元旦には「城主」に祈祷札を納めました。この頃、姫山に居を構えていたのは、小寺（黒田）氏です。福岡藩主となった後も、黒田家は惣社を敬い、毎年奉幣・供物することを依頼、「筑前御祈祷」が執り行われていました。

さて、表1は、文化元年（一八〇四）の年中行事を表にしたものです。この中で、元亀元年にも行われていた行事に注目し、五つの年中行事（表1のグレー部分）を取り上げて、ご紹介したいと思います。月日は、旧暦です。

【一】お田植え・田楽踊り　－五月五日－

注目されるのは、田楽踊りが奉納される点です。「府中社年中行事」では田楽の他に、八ヶ村の農民による「田草舞」もあったことが記されています。田楽は書写山の僧が務めましたが、江戸時代も「田楽法師」は二人の「書写山常仕」でした。境内の「御影向松」（「三百年（みおとせ）の松」とも）の下で、「ビンザヽラ笛ニテヲカシキサルガクノ如キ事」（「年中行事濫觴故事」英賀神社文書）をしたそうです。

なぜ、書写山から田楽法師が来るのでしょうか。「年中行事濫觴故事」は、開山の時、性空上人が惣社に祈願し、そのお礼として田楽を務めているのだという伝承を載せています。また、「六ケの寺僧」の大般若転読もありました。「六ケの寺」は播磨六山、書写山円教寺・増位山随願寺・八徳山八葉寺（姫路市）、妙徳山神積寺（神崎郡福崎町）、法華山一乗寺・蓬莱山普光寺（加西市）です。播磨六山には国衙との関係が指摘されており、国衙と惣社も密接に結びついていたに違いありません。

そして、この日に謡われた「はやしものゝ童謡」については、「播磨府中めぐり」にその文言が載っていますが、その文言は三ツ山大祭の神能の初めに演じられる「丹有」の歌詞とほぼ同一です（後述）。

【二】夏祭りの起源・影向（ようごう）祭　－六月十一日－

影向祭は、現在の七月十・十一日総社夏祭りに相当します。「影向祭」という名称は、総社の祭神の一柱、兵主大神の影向に由来

表１　文化元年「総社年中行事」一覧（「総社々記」英賀神社文書）

月　　日	行事名	内　　容
１月１日	御戸開（恵方馬の事）	
立春	立春	立春の祈祷大神楽、鏡餅のほか鮎魚・長者餅など
卯日	御鏡餅ナラシ	藩主が在城なら社参
８～14日	四節御祈祷	祈祷・音楽・大神楽
11日	筑前御祈祷	祈祷・音楽・大神楽
13日	注連オロシ	門松タヲシ左義長
16日	町中祈祷	祈祷・音楽・大神楽、赤飯を献ず
28日	御代参	御初穂銀、祈祷・音楽・大神楽
２月１日	御戸開	大般若転読（社の式にあらず）
３月11～17日	太々神楽	天保９年（1839）より、３日の執行は氏子町中奉納
４月17日	東照宮御祭日	祈祷・音楽・小神楽
５月２～８日	四節御祈祷	祈祷・音楽・大神楽
４・５日	御粽	祈祷・音楽・大神楽、田楽法師
11日	筑前御祈祷	音楽・大神楽、赤飯を献ず
16日	町中祈祷	祈祷・音楽・大神楽、赤飯を献ず
６月８日	穴師潮浴	11日まで潔斎
10日	御祈祷	音楽・二人舞・大神楽　※催馬楽
11日	御祈祷・麺供献備	両夜氏子中献神燈
29日・晦日	名越祓	両夜、御手洗池で執行、29日夜に祓具・撫物を飾万川へ持出し流す
７月７日	御祈祷惣出仕	上月氏より瓜を献備、社中各頂戴す
11日	踊御神事御鬮（くじ）	福中村・西城戸氏、宿村・上月氏、国府寺村・瀬川氏が鬮を引く（３氏とも神官）
13・14・15日	踊御神事	太鼓三ツ揃へバ御祈祷、祓殿東西焼、町両奉行・寺社方下役二人、町大年寄・年行事出勤
８月１日	御戸開	社領百姓、新米を献ず
９月２～８日	四節御祈祷	祈祷・音楽・大神楽
９日	節句	祈祷・大神楽
11日	筑前御祈祷	祈祷・音楽・大神楽、赤飯を献ず
16日	町中祈祷	祈祷・音楽・大神楽、赤飯を献ず
11月４日	社頭惣燈籠張	
８日	穴師潮浴	
11・12日	大御供拵	惣出勤
14日	氏参	
15日	神輿神移	御霊御祈祷、神幸、御旅殿御供、御代参、御初穂銀、猿楽など
16日	大御供献備	祈祷・音楽・大神楽、還幸、御霊御祈祷、神輿遷宮
25日	榊祭御祈祷	榊枝、前日に社領百姓が貢進。小豆餅を社中各頂戴
12月２～８日	四節御祈祷	祈祷・音楽・大神楽
12日夜	煤篭夜話	豆飯、酒・豆腐
13日	御煤払	
21日	乙寄合	
28日	大御供拵	
晦日夜丑刻	追儺之御神事	疫鬼を逐う所也

します。「府中社略記」（『智恵袋』）は、「延暦六年（七八七）六月十一日」（「姫辺古記」（『智恵袋』）は「師安元年」）坂上田村麻呂が水尾山に祀られていた大己貴命（兵主大神）を「国衙小野江」（総社の故地、椰本）に移したと記しています。つまり、六月十一日は、惣社の創始にあたる日でした。「年中行事濫觴故事」に「山一ツ紙ニテ張生松八本うゑ候」事が行われたとあり、一ツ山大祭とのつながりという意味でも注目されます。この祭りは、江戸中期には知る人も少なくなっていたのですが、大切な神事であることを藩主に申し立てたところ、「鶴足跡」（英賀神社文書）によれば、「時の領主松平大和守義知（明矩）公の指揮」で延享元年（一七四四）「諸人夥しく参詣仕る」ようになったとか。「世俗「夏祭」という」とも記されています。

十年ほどすると、「本町より踊場の西方に数寄屋を立て」たり、「綿町より踊場の西に」「えびら桜の見立物」を造ったりと、各町が競って趣向を凝らすようになりました。いわば、参加型の城下町祭礼へと発展していったのです。

【三】盆の念仏踊り・修羅踊り
－七月十三・十四・十五日－

明治に廃絶した修羅踊りは、「府中社年中行事」に「刀剱のおどり神事」と記されています。七月一日から十日まで、十六ヶ村の氏人によって行われました。総社公園は、「血の池」と俗称された御手洗池の跡地ですが、刀剣によって傷ついた人々がこの池で血を洗い流した、あるいは、この池で傷を洗うとたちまち傷が癒えたことからそう称されたといいます。

「修羅念仏」とも呼ばれており、旧暦七月、盆に行われる念仏踊りがその起源だったと考えられます。氏子村の人々が、明け方に太鼓を持って総社広前に群集し、太鼓を打ち鳴らし、童子らが旗指物や大きな旗、さまざまな作花を持って踊りました。

この時に謡われた「七月踊謡」の文言も、「丹有」の歌詞と似ています。「丹有」の歌詞は、「八千矛神のます宝殿や、御幸や御幸や、山神まします、臼つき餅をまいらせん、御幸や御幸や、さゐやりさゐやり、数鉾殿、宝殿や宝殿や」。そして、「七月踊謡」の文言は、「宝田哉、豊年哉々々、八千矛神の広前に、幸有哉、豊年哉、宝田哉、豊年、かくの如く穂成就祝う也」。豊作への強い願いを感じずにはいられません。

写真１　総社公園入り口に立つ「血の池」石碑

【四】今も昔も例大祭・霜月大祭
－十一月十四・十五・十六日－

十一月の霜月大祭は、播磨の秋祭の最後を飾る祭りとして知ら

れています。『夜話集』によれば、当時の霜月大祭を俗に「氏人祭」といい、十五日早朝に神輿三基が御旅殿（御旅所）に御幸、十六日還御しました。現在お旅所はありませんが、近代までは総社西の御手洗池北側にあり、古くは神屋町にあったとされます。平成二十六年の霜月大祭から、中絶していた神輿の神幸行列が復興されました。

三基の神輿の神霊は、射楯大神、兵主大神ともう一柱、九所御霊とされます。九所御霊は、「姫辺古記」によれば、「十一月十六日幣ト現シ、九松ノ木影向」した神で、古い神霊として重要視されていました。今も、十一月十六日に九所御霊祭が執行されています。

「十四日朝ヨリ氏子参詣」「種々商売物ヲ持出見せ飾り」（「鶴足跡」）と、姫路の町は祭礼気分にわいたようです。また、「宿居堂之前舞台ヲ立テ廻リ四方ハ御サンジキ掛」「下サンジキ氏子ハ町割ニサンシキ渡ル」とも記されていますが、これは御旅所前に設置される「御能」の見物席についての記述です。「惣社舞台翁領」として太夫に「三石」が与えられるなど、江戸時代の祭礼において能楽は重要な位置を占めていました。

【五】総社の追儺（ついな）・鬼太鼓

－大晦日－

この行事は現在行われていませんが、「鬼つゝみ（鬼鼓）、四方祓い、鬼石の御法」を行った、中世の「鬼塚ノ事」（「府中社年中行事」）の系譜を引くと考えられます。江戸時代、鬼石は「案内社町武宅ノ前」（『播磨鑑』）にありました。『図絵』にも描かれ、「人恐れてこしをかけず」と記されています。

「鬼太鼓」は、神官が「太鼓ヲ荷、ヲコナイヲイフテ、クルリクルリト廻リ、仕舞ハばちヲ捨テ帰」（「鶴足跡」）える儀式で、大名町大手ノ前・袋町ノ行詰・惣社御門石橋之前・内京口石橋の四ヶ所で行われました。投げ捨てたバチが家に飛び込んだり、バチを拾ったりすると災難が降りかかると信じられ、鬼太鼓に「行逢者太鼓ノ声ヲ聞ヨリ速ニ退」いたそうです。神秘的な行事とされていましたが、「鶴足跡」によれば、「古ハ太鼓ノ間ハ表ノ門戸ヲシメテヒソカ居申候ガ、近年カケ取之人ニ立溜リテ見物ス」という状況になったとか。

鬼太鼓は、宮中で行われる追儺と同じ意味を持つ儀式で、境界を清めて新しい年を迎える大切な行事でした。『播磨鑑』には、鬼石は「鬼やらひ時の修行の石座也」と記されています。「酒呑童子か石」「聖徳太子腰掛玉ふ石」という伝承が生まれたのは、みだりに触れてはいけない、その神聖性ゆえだったのではないでしょうか。

おわりに

射楯兵主神社は、古代の国衙にとって重要な神社であり、中世国衙庄の荘園鎮守でもありました。播磨国総社として、播磨国守護だった赤松家や姫路藩の代々の城主に敬われました。年中行事のあり方を見ていくと、そうした面だけでなく、姫路の城下町の町人たち、そして庄域の村々で暮らす農民たちにとっても、城下町の繁栄や五穀豊穣をもたらす、大切な産土神だったことに気付かされます。これからも、人々の願いに寄り添う形で、総社の年中行事は進化していくのではないでしょうか。

令和四年度　保存会活動報告

令和四年度役員会並びに特別講演会「総社の年中行事―江戸時代を中心に―」

（令和四年七月十九日）

令和四年度の役員会に合わせ、特別講演会を開催しました。

役員会は、役員十九名の出席、三十四名の委任状により開会しました。

田中会長の挨拶では、「前回の三ツ山大祭より十年となります。その間、平成二十七年に当保存会が発足してより、三ツ山大祭の普及啓発や伝統の継承の為、造りものの製作や講演会などを行ってきました。今年はにわか衣装の製作学習会を予定しており、その活動は着実に実を結んでおります。保存会の活動が、十一年後の三ツ山大祭に大きな成果を表せたら」と抱負を述べられました。引き続き、姫路市議会議長 宮本吉秀様（当会顧問）より、伝統と文化の継承の為、その役割を果たす保存会の意義は大きいと、ご挨拶を頂戴しました。

続いて議案の審議に入り、各号議案とも一同異議無く承認されました。

役員会後、特別講演会に移りました。講師に、播磨学研究所運営委員兼研究員 埴岡真弓氏をお迎えし、「総社の年中行事―江戸時代を中心に―」の講演をいただきました。

特別講演会に際しまして、ご公務のお忙しい中、姫路市長 清元秀泰様（当会名誉顧問）が聴講に来場されました。清元市長から「歴史と伝統、町の人たちが伝えてきた三ツ山大祭。コロナ禍だからこそ、一ツ山三ツ山に対してご理解をいただき、姫路を元気にする活動を行ってもらいたい」と激励を受けました。

特別講演会では、写真や絵図をもとに江戸時代と現在の総社の境内の建物や配置の違いなどをご説明いただきました。

また、「播磨鑑」や「年中行事濫觴故事」、「鶴足跡」や「姫辺古記」などの古文書をもとに、総社が城下町として都市祭礼の年中行事となっていった事などや、行列や田楽などの風流についてご説明いただきました。

小休憩の後、絵図や写真、絵葉書などを見せながら、年中行事の変遷や境内の変容など、わかりやすく詳しくご説明いただきま

した。

九十分という短い時間ではありましたが、総社の興味深いお話をいただき、聴講された五十名余の方々は、真剣に聴き入っていました。

にわか衣装製作学習会

（令和四年八月二日～九月二十八日）

にわか衣装製作学習会を、令和四年八月から九月にかけて、十回に亘り実施しました。

今年度は、祭礼を路上で即興の芝居や踊りなどで貢献していた「にわか（俄）」と呼ばれる人々に着目しました。

臨時大祭礼見聞録三によると嘉永七年のにわかは、様々な仮装で城下を練り歩いていたようで、中でも見栄えがするだろうと「南蛮人」の衣装の製作に決まりました。

南蛮人の衣装の資料を集めるところから始め、帽子・ヒダ襟・袖口・コート・ズボン・サーベルを作ることになりました。

製作は、みみづく工房のみなさんにご指導いただきながら進めていきました。

不要になった着物を布に戻し、柄と色の兼ね合いをみながら、六着のコートとズボンを製作しました。

南蛮人の衣装の中でも目を引くヒダ襟。どうやって自立させるのか、ボリュームを出すのかなど、素材から試行錯誤を繰り返し、縫い方を何度も変えて、ついに納得のいくものが出来上がりました。素材を合わせて手首に着ける形で袖口を作りました。

個性的な帽子やサーベルも手作りです。長くする方法や重くならない素材を何度も店舗へ足を運び検討しました。帽子は型を作り、クッション材で長さを出しました。色とりどりの装飾を施し、どれも鮮やかなものとなりました。サーベルはパイプと木材を使って鞘から抜けるように、衣装と着脱できるようにこだわりました。鍔（つば）の部分はお椀を使用しました。

工夫を凝らした六着のにわ

か衣装が完成しました。ほとんどすべての工程が参加者の手作りであったため、みなさんの達成感あふれる顔が印象的でした。口々に「よく作れたなぁ」「素敵なものができたなぁ」と喜んでおられました。

学習会最終日には、名誉顧問の清元姫路市長が来訪されました。にわか衣装に興味をもっていただき、手作りの帽子もかぶってくださいました。

造りもの展

（令和四年十月一日～十月三十日）

本年も、保存会の活動の成果を紹介するために「造りもの展」という展示会を開催しました。

会場に入ると賑やかなにわか衣装がお出迎え。マネキンを用意し、にわか衣装を展示しました。近くで衣装を見ていただけるように配置にこだわりました。天狗の曳き物、大傘に鎧兜、謡囃子の様子を紹介した写真パネルも展示しました。

今年度は会員のみなさまに展示会受付を毎日交代で行ってもらい、会報誌「神のやま」を配布し、多くの方に芳名帳にお名前をいただくこともできました。兵庫県だけでなく、他府県からもお越しになられる方がおられ、保存会の活動を伝えることができたのではないでしょうか。

にわかと謡囃子（うたいばやし）実施

（令和五年一月十五日）

三年ぶりにこの景色が帰って来ました。

謡囃子は、令和元年に再興しましたが、令和三年・四年はコロナ禍の為、総社境内での特別上演となっており、なかなか外に出られない状況でした。

コロナ禍で様々な行事が中止・縮小になっている間、保存会では来たる時に備えて、大傘、天狗の曳き物、にわか衣装を手作業で製作してまいりました。「はやく地域に出て、製作したものを見てもらいたいなぁ」、という私たちの三年分の願いが通じ、ついにパワーアップした姿をお披露目する日がやってきました。

このたびの行列は、にわかを先頭に、鎧武者、高張

提灯、大傘、太鼓や鉦を打ち鳴らし笛と三味線に合わせ踊る姫路・城東連に続き、大天狗の曳き物、三ツ山台車、三ツ山踊り保存会の順に進んで行きました。

　謡囃子の演者たちはマスク越しながらも晴れやかな顔で、賑々しく町を練り歩きました。沿道からは、大天狗の曳き物をはじめとするパワーアップした謡囃子の姿に驚きの声と、たくさんのカメラが向けられ、熱い声援も送られました。

　今回の参加人数は、約一〇〇名、播磨国総社初ゑびす祭宝恵駕籠行列と合わせると総勢約四〇〇名の参加となりました。令和二年に負けず劣らず、むしろ、にわかや大天狗の登場でより迫力あるものとなりました。

　午後は、姫路駅北にぎわい交流広場へ繰り出しました。宝恵駕籠行列のお迎えとして、姫路・城東連が先に駅前で踊っていると、外国人観光客の方が一緒に踊ってくれました。

　セレモニーが始まり、舞台で鏡開きを行った後、三ツ山踊り保存会としんきひかり保育園の園児も参加した三ツ山踊りが披露されました。園児たちは法被にハチマキをまいた姿で、練習してきた踊りを一生懸命踊り、会場の雰囲気があたたかいものになりました。園児たちにも良い思い出として刻まれてくれるといいなと願います。

　姫路・城東連のステージでは、途中からにわかも舞台へ上がり、一緒になって即興で踊るという当時のにわかの再現を披露することができました。

　その後の行列は、神姫ひかり保育園の園児たちも合流し、よりにぎやかに総社へと練り歩きました。

　今回初めて参加したにわかの演者からは、「にぎやかしができて良かったし面白かっ

た。次回はもっと『にわか』の人数が増えてくれれば」という感想をいただきました。

三年ぶりに姫路市内に謡囃子を繰り出すことができた喜びと、無事終了したという安堵で感慨もひとしおです。

最後になりましたが、謡囃子に向けてご協力いただきました氏子・会員の方々、置塩城鎧工房の方々、神姫ひかり保育園の方々、崇敬者・関係各位に心より感謝を申し上げます。

姫路南ロータリークラブ社会奉仕フォーラムでの講演

（令和五年三月二十七日）

三ツ山大祭と保存会の取組みについて、稲岡事務局長とえかき・ものづくり作家のドウノヨシノブ氏が講演を行いました。

稲岡事務局長より、射楯兵主神社の創祀と播磨国総社の歴史・三ツ山大祭の神事について説明し、保存会のこれまでの活動などを紹介しました。ドウノ氏からは、自身の取組みや製作物の紹介の後、三ツ山大祭の造りものの歴史、平成二十五年の三ツ山大祭の地域での造りもの製作、また保存会での造りもの製作についてのお話がありました。

聴講された方々の質問や感想を伺い、地域で造り物を作ることに大変興味を持っていただくことができたと感じました。

令和五年度　保存会事業予定

一、調査・研究事業　　会報誌第七号発行
　　謡囃子記念誌発行
二、研修会・講演会事業　　記念講演会
　　造りもの製作学習会の実施
三、会議　　役員会
四、その他関連事業行事等　　小袖の陰干し
　　造りもの展
　　謡囃子の実施

「悠久の歴史を伝える播磨国総社一ツ山大祭・三ツ山大祭」好評頒布中！

一ツ山大祭・三ツ山大祭のすべてがわかるこの一冊！

一冊三〇〇円　播磨国総社にて

いよいよ 10 年後！

第 23 回
播磨国総社三ツ山大祭
令和 15 年 4 月斎行予定

発　行　令和5年3月31日
発行所　播磨国総社　一ツ山大祭・三ツ山大祭保存会
姫路市総社本町190 播磨国総社射楯兵主神社内
☎079-224-1111　fax 079-224-1114
【E-mail】hozonkai@sohsha.jp 【HP】http://sohsha.jp

〈表紙〉播磨国総社三ツ山大祭 龍野町三丁目 造り物「草刈童児」写真　大正2年（1913）　播磨国総社 提供